

献辞(古川顕先生へ)

著者	永廣 顕
雑誌名	甲南経済学論集
巻	53
号	3・4
ページ	i-iii
発行年	2013-03-25
URL	http://doi.org/10.14990/00001466

献辞

古川顕先生は、平成24年6月11日に満70歳の誕生日を迎えられ、本年3月末日をもって本学を定年退職されることになりました。

先生は、昭和41年3月に京都大学経済学部を卒業後、同年4月に三和銀行（現三菱東京UFJ銀行）に入行され、同行調査部に勤務されていましたが、研究を続けるべく京都大学大学院経済学研究科に入学されました。その後、神戸学院大学経済学部、大阪大学教養部、関西学院大学経済学部を経て、京都大学大学院経済学研究科・経済学部教授に奉職され、京都大学名誉教授の称号を授与された後、平成18年4月に本学経済学部特任教授として着任されました。

金融・金融政策の分野をご専門とする先生がまとめられた研究書の代表作は、『現代日本の金融分析—金融政策の理論と実証』（東洋経済新報社、昭和60年）であります。本書は、1970年代に激しいインフレーションが発生したことにより、名目金利の金融指標としての機能が低下するという事態に対応して各国の金融政策が従来の名目金利重視型からマネーサプライ重視型へと大きく転換し、同時に、学界においてはケインジアンに対するマネタリストの批判が説得力を増すようになった状況下で、マネーサプライ重視型の金融政策の理論的根拠を検証し、それを日本の現実に照らして実証した研究です。通説の批判的検討、モデルの設定による自説の提示、データによる検証、政策的インプリケーションを踏まえ、1970年代から80年代はじめにかけて起こった金融政策と金融理論の大きな変化を理論と現実の相互検証によって総括することに成功した本書には、第26回（昭和60年度）エコノミスト賞（毎日新聞社）が授与されました。

近年の先生は、経済学者R. G. ホートレー（Hawtrey）の業績の復権に取

り組んでられました。ホートレーの理論・主張は、第2次世界大戦以前は批判の対象とされ、大戦以降はJ.M.ケインズの名声に隠れて忘れ去られていました。しかしながら先生は、経済学説史の研究においては、現実とのかかわりを重んじ、その現代的意義を考察する必要があるとの認識から、ホートレーの業績を分析し、彼の貨幣・信用理論や金融・財政政策論などが今日でも十分に通用し、ケインズを凌駕するものであることを明らかにされたのです。先生の研究によって再評価されたホートレーの業績は、『R.G.ホートレーの経済学』（ナカニシヤ出版、平成24年）に集大成されました。

先生は、研究書だけでなく、教科書や啓蒙書も公刊されています。『テキストブック 現代の金融』（東洋経済新報社、平成11年、平成14年〔第2版〕）は、金融の基礎理論を解説しながら、同時に、金融市場や金融制度の変化を丹念にフォローし、バランスのとれた標準的なテキストとして定評があります。また、日本銀行と金融市場、金融政策、金融システム改革の行方を論じた『日本銀行』（講談社現代新書、平成元年）では、バブル経済期の公刊であったにもかかわらず、バブル経済崩壊後の金融の混乱を先取りした議論がみられ、先生の見目の確かさが窺われます。

研究活動に加えて、先生は、学会などの社会的活動にも積極的に幅広く活躍されてきました。また、温泉行脚、離島巡り、俳句、四国遍路など趣味も多彩であり、これらについて広い学識を交えて綴ったエッセイ集『旅の途上で』（ナカニシヤ出版、平成22年）を68歳の誕生日に出版されています。

甲南大学経済学部では、先生は、「金融」と「金融政策」を主要科目として担当されました。講義においては、教科書と同様に、現実の金融問題を理論的および政策的側面からバランスよく解説され、学生たちを惹きつけました。また、「よく学べよく遊べ」をモットーとした古川ゼミは、「ONとOFFの切り替えがしっかりできるゼミ」、「金融の知識だけではなく、人としての教養も豊かになるゼミ」として人気があり、先生の人柄を慕う多くの学生が

集まりました。

古川先生は、本学在職中、研究・教育において多大な貢献をされました。その真摯な姿勢は学究かつ教育者の模範であります。先生のご健康とますますのご健筆をお祈り申し上げるとともに、今後とも私たち後進にご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ここに本記念号を捧げ、先生に感謝の微意を表しますとともに、重ねて先生のご多幸を祈念いたします。

平成25年3月

経済学部長／経済学会評議員長 永 廣 顕